



ブータンで行った技術指導の様子



島根県 浜田市 ブータンの伝統紙に 石州和紙の知恵

石州和紙協同組合・代表理事
久保田 彰さん

島根県浜田市の石州和紙は、1300年の歴史を持っています。コウゾ・ミツマタ・ガンピの繊維を原料とし、トロロアオイという植物から作る補助剤を加えた液を竹簀に入れ、繊維を絡み合わせながら紙の層を作ります。こうして作られる和紙は、とても頑丈です。

ブータンにも数百年続く伝統の手すき紙があります。でも、伝統紙を作っている東ブータン・タシヤンツェ県の農家では、副業としての生産にとどまり、紙の品質にもばらつきがありました。東ブータンは他の地域に比べて生活水準も低いことから、同国政府は、伝統紙の品質向上と商品化による産業振興を目指しているのです。

石州和紙協同組合は、2013年から同国経済省家内小規模工業局に協力し、主に現地の農家を対象に手すき紙作りの技術指導や商品化に向けたサポートを行ってきました。ブータンの手すき紙は、黒っぽく艶やかな美しさを持っています。指導にあたっては、日本式の技術だけを教えるのではなく、ブータンの伝統紙独自の良さを大切にしながら、品質の向上を目指してきました。現地で開催した技術指導のワークショップに、徒歩で片道3時間かけて参加してくれた人がいたことは印象的です。この他、浜田市でも研修を実施し、石州和紙の製造法や原材料の栽培・採取の方法などを伝えました。

プロジェクトをきっかけに、農家主体の紙組合の設置も実現。今後、製品開発や販路開拓に向けて、一層活発な取り組みが行われていくことを期待しています。



青森県 藤崎町 ウズベキスタン産の 高品質なリンゴを

弘前大学農学生命科学部・教授
荒川 修さん

青森県と言えば、リンゴ。藤崎町は、甘味と酸味のバランスや貯蔵性の良さが特徴の“ふじ”発祥の地で、その栽培に長い経験と高い技術を持っています。以前、JICAが果樹栽培の技術向上のプロジェクトを行った際、専門家がふじを現地に紹介したことから関心が高まり、今、ウズベキスタンではふじの栽培面積が増えています。しかし、リンゴの品種や栽培技術、販売システムは旧ソ連時代のもので、改善が必要です。そこで、長年のリンゴ栽培経験と熟練の技術を持つ藤崎町の農家が協力し、昨年3月から、ウズベキスタンの農務省や農業大学、果樹栽培研究所の関係者らを招いて研修を実施しているほか、現地での指導も行っています。

活動の目標は、ウズベキスタンのリンゴ栽培技術が向上し、より品質の高いリンゴを生産できるようになること、その販売を通じて農家の生計が向上することです。弘前大学は、日本の技術をウズベキスタンに適應させるべく、研修や技術移転に関する効果的な教育プログラムを立案したり、栽培技術や流通販売技術の向上を科学的な観点からサポートしたりしています。

研修員たちは大きく立派な日本の高品質のリンゴに驚き、その技術を学ぶ姿も真剣そのものです。今後は、彼ら自身が現地の大学生や農家に、講義や実技を通して栽培技術を伝えていけるよう、指導的な役割を担う人材の育成に取り組む、より多くの農家に近代的な技術が広がることを目指しています。



[上] 高品質のリンゴを作るには、枝の剪定作業も重要だ
[下] 昨年11月、研修員らは藤崎町でふじの収穫技術を学んだ



神戸市で行われた演奏会。Irisと芥川高校和太鼓部、JICA和太鼓クラブのコラボが実現した



おいしい！美しい！感動的！
日本の地方には、数々の宝がある。
世界に発信されているそんな地方の宝をご紹介します。

世界とつながれ 地方の宝

特集地域の宝
おらがまちの世界



大阪府 和太鼓の 音色がつかないだ絆

アイリス
和太鼓チームIris・リーダー
中塚 咲さん

私 たちIrisは、大阪府立芥川高校・和太鼓部の卒業生で結成している和太鼓チームです。結成のきっかけは、今から7年前の高校3年生のとき、授業で世界の貧困について学んだことです。自分たちも何かできることをやりたいという思いを和太鼓部の仲間と話したら、みんなが賛同してくれて、チャリティーコンサートを開催することになりました。

最初の目標は、コンサートで集まった募金で、バンラデシュとネパールに井戸を造ること。全てが一からの挑戦でしたが、学校の先生、地元のNGO、会場を無償で貸してくれた方など、多くの人の協力のおかげで2回のコンサートを開くことができ、合計30万円ほどの募金が集まりました。その後、それぞれの国から完成した井戸の写真が送られてきたときには、胸が熱くなる思いでした。

今では活動の幅が広がり、年に約30回の演奏会を行っています。また、来日中のJICA研修員で結成されたJICA和太鼓クラブに、定期的に指導を行っています。最初はなかなか言葉も通じず、どのように教えたらいいのかわかりませんでした。そんなとき、硬い表情で演奏している研修員の方々を見て、まずは日本の伝統楽器を心から楽しんでもらうことが一番大切だと気付いたのです。難しく考えず、ただどよみ英語でも和太鼓の魅力を伝えようと努力していくうちに、自然と笑顔が生まれました。

これからも、和太鼓を通じて生まれたたくさんの絆を絶やさずにつないでいき、チームとしてもさらなる飛躍を目指します。



石川県 輪島市 漆と共に 成長するまちを

カブレット
輪島 KABULET・マネージャー
有泉 仁美さん



漆製品について地元の人から聞き取り調査を実施

石川県輪島市は、国内の他の地方と同様、少子高齢化や過疎化などの問題を抱えています。こうした問題に官民連携で取り組んでいこうと昨年立ち上がったのが、「漆の里・生涯活躍のまちづくりプロジェクト（輪島KABULET）」です。

輪島KABULETは、世代や文化の垣根を越えて、「人」を主役としたまちづくりを目指すプロジェクトで、この取り組みを推進する役割を担うことになったのが、私たち青年海外協力隊の経験者12人です。管理栄養士、保育士、木工、野菜栽培、青少年活動など、幅広い分野の人材が全国から集まり、輪島市に移住しました。今は、市内の空き家を活用して、高齢者向けの住宅やグループホーム、子育て世代の母親の交流施設などを整備するという目標に向けて、それぞれが持つ資格や職種と、それに関連する地元の人々とのつながりを構築するべく日々奮闘しています。

また、今私たちが構想を練っているのが、地元の伝統工芸である「輪島塗」に代表される漆を生かしたまちづくりです。漆産業の関係者の方の意見も聞きながら、漆の植栽や採取を将来的にも仕事として継続していけるか、漆を使ってどのような製品を生み出せるかなどを検討しています。

プロジェクト開始からまだわずかですが、徐々に地元の人たちの期待も高まり、協力者も増えてきました。見知らぬ途上国の地で、現地の人たちと何かをやり遂げた隊員時代の経験を、今度はここ輪島市で生かすときだと思っています。